

# なぜ私は日常場面のフィールドワークに 惹かれるのか

## —在外研究中間報告—

黒住 早紀子

### 1. はじめに

筆者はフィールドワークという研究手法を好み、自分自身が学校現場に赴いてそこで学校生活を送る子どもたちの関係に巻き込まれながら研究をすることに、なぜだかこだわりがある。研究というものに関心を持ったのも、この道に進むと決めたのも、フィールドワーク中の体験がきっかけとなった。このこだわりは一長一短で、悩みの種でもある。フィールドに通い見聞きした体験を記録に残すことと、記録を分析して研究の形にまとめることは別であり、筆者の大きな課題は、形にまとめられていないことだ。このままではいけないと思いながら、膠着状態が続いている。

駒澤大学に勤めて 10 年目になる 2023 年度、在外研究の機会をいただいた。現在、東京大学大学院教育学研究科の私学研修員となり、複数の授業を聴講させていただきながら過ごしている。本学の在外研究に関する規定によると、在外研究員は「学術研究と教育の振興発展を促す」という目的のもとで派遣（第 1 条）され、「研究・調査に専念」する義務（第 5 条）がある。筆

者が研究に専念するためには、自分自身の研究を遂行する上で不可欠な「フィールドワーク」に関するこれまでの体験を、言葉という形にして語れるようになる必要があると考える。

過去に論文指導でお世話になった先生に「“静”の状態だから見えることがあるんだよ。」というご助言をいただいたことがある。確か筆者が博士課程在籍中の3年目だった。博士課程の3年目は、おそらく多くの学生がひとつの節目を感じる時期なのではないかと思う。あの頃の私は、臨床と研究の両立を目指すと周囲に言いながらも、心理士としての仕事やフィールドに行くことそのものには精を出していたが、フィールドでの体験を研究という形にすることははっきり向き合えていなかったと思う。そのような私の姿が先生には“動”の状態に映り、この助言をくださったと理解している。先生のこのお言葉がずっと頭の片隅にありつつも、“静”になる方法をじっくり考える心の余裕が持てないまま長い時間が経ってしまった。

本学の在外研究の規定に準じ、筆者が自分の研究に専念するため、まずしっかりと自分自身のフィールドワークと向き合うことから始めたい。この機会に意識的に立ち止まり、“静”の状態で、これまでのフィールドワークを静観してみれば、現状から一步進むにあたっての何かが見えてくるかもしれない。そのような期待を込めて、本稿では、筆者のフィールドワーク史を整理し概観することとする。

## 2. フィールドについて

本稿で“フィールド”という言葉を使う場合は主に学校現場を指すが、この言葉でイメージされるものは、専門領域によっても異なるだろう。そもそもフィールドとは何なのか。研究の方法としてフィールドワークを採用する学問領域は多々ある。例えば、生物学の生態調査、地理学の地形調査、考古学の発掘調査、文化人類学の現地調査は、どれも研究者がそれぞれの“フィールド”に赴き調査を実施するフィールドワークである。何を研究対象とし、

どこを“フィールド”とするかにより、フィールドエントリーのハードルにも違いがあるだろう。そこで、ここでは参入段階でのフィールドについて考えたい。

伊藤（2005）は、フィールドへの参入にあたって、おおまかなフィールドの種類を下の切り口で分類している。

- ① 身近なフィールド——異文化のフィールド
- ② 近いフィールド——遠いフィールド
- ③ 常設のフィールド——定期的なフィールド——一時的なフィールド
- ④ 居場所の作りやすいフィールド——居場所の作りにくいフィールド
- ⑤ 境界線のあるフィールド——境界線のあいまいなフィールド
- ⑥ 参入しやすいフィールド——参入しにくいフィールド

筆者がこれまでフィールドとしてきた学校現場を、この分類に当てはめてみると、①身近で、②近くて、③常設的で、④役割があれば居場所が作りやすく、⑤敷地や校舎というはっきりした境界があるフィールドであると言える。このように①から⑤は判断しやすいが、⑥に関しては提唱者の伊藤自身も「一概には言えない」と言うように、筆者も簡単に説明ができない。筆者の主観では、学校現場は学生の方が参入しやすく感じる。学校が教育の場であるからだろうか、学びを提供する側である学校は、学び手である学生は受け入れ慣れており、比較的オープンな印象を受ける。しかし、学生でもない学校関係者でもない大人が参入しようとする場合は、警戒が強く慎重である。ただでさえ学校は忙しいうえに、安全管理面や危機管理面、倫理的配慮の問題も浮上するからだろう。フィールドエントリーを考える際には、現場側から何を求められているか、どのように見られているかという視点も、それに応答できるか否かは別として、持っておく必要があると感じている。言わずもがなかもしれないが、学校は様々な“人”で創られ動いているという特徴があることを忘れてはならない。実際、人が一人変わるだけで全体の雰囲気の様変わりすることもあるほど、学校という実体はその中身を構成する人の

影響を受ける。だからこそ、参入の期間が短期であろうと長期になろうと、そこでの様々な人たちを大事にしていかなければならないと自分に言い聞かせている。

筆者が取り組んできたフィールドワークは、箕浦（1999）が定義するフィールドワークとイメージが合致する。その定義とは「人と人の行動、もしくは人とその社会および人が作り出した人工物（artifacts）との関係を、人間の営みのコンテキストをなるべく壊さないような手続きで研究する手法」（箕浦、1999、pp3-4）である。

### 3. これまでのフィールドワークについて

#### (1) 養護学校でのフィールドワークの概要と振り返り

筆者の初めてのフィールドは養護学校だった。フィールドに繋がったきっかけは、大学3年次に履修した大学の講義である。確か「10回通って、気が付いたことをレポートにまとめる」というような課題が課され、週1ほどの頻度で養護学校に通うことになったと記憶している。筆者が割りあてられたクラスは、重度重複障害のある子どもたちのクラス（小学生～中学生）だった。はじめは特に何か役割を持って現場に入ったわけではなく、活動中は児童生徒側の立場で授業に参加させていただくこともあれば、教員側の立場で授業補助や日常生活介助に関わらせていただくこともあった。

そのクラスの教室には、机やホワイトボードといった学習に必要なもの以外に、簡単な調理が可能なキッチンや、一部に寝転がれる絨毯スペースもあった。キッチンにはコンロは設置されていなかったように思うが、シンクと調理台と冷蔵庫、そしてキッチンバサミやミルサーなどの調理器具もあった。絨毯スペースは、子どもたちが車いすやストレッチャーから降りて、並んで寝転がれるほどの広さであった。初めてこの教室に入ったとき、通常の学校の教室のつくりとは異なり家庭に近い作りであることが印象に残った。一般的な教室よりも少し広く感じるスペースに、児童生徒はたしか5人前後で、

先生は2～4人（訪問学級担当の先生も含む）いらしたと思う。

授業中でも休み時間でも、いわゆる“言葉”でのおしゃべりが子どもたちの間に飛び交うことはなかったが、先生方の話しかけとそれに対する子どもたちの応答（単語、笑顔や発声）のやりとりの場面はたくさんあった。場を明るくしたり穏やかにしたりするために音楽を流していることもあり、行く度にこのクラス特有の居心地の良さを感じていた。

この場に私が感じた居心地の良さとは何だったのだろうか。もう少し深堀りして考えてみたい。例えば、ゆったりとした体感速度の時間、常に子どもが中心にいる空間、子どもの反応を“待つ”ことを大事にする先生方の姿勢が挙げられる。特に、先生方が子どもの反応を“待つ”ときの眼差しと笑顔がとても温かかった。子どもたちが満面の笑顔になるとき、ゆっくりゆっくりと表情が変わっていくのだが、先生方もそれに合わせてゆっくり笑顔になっていく。このシンクロしていく場面にある関わりがすごく素敵だった。言葉がポンポンと飛び交い笑い声上がるような場所のテンポよい心地良さもあるが、この場面で生じる居心地のよさは、ここに行かないと遭遇できないし味わえないものだった。

当時は、この養護学校は私のような学生を毎年受け入れていたようで、授業課題終了後も活動継続を希望する学生もいた。さらに、代々卒論を書かせていただく歴史もあった。このクラスの主任の先生に「卒論をここで書くのはどう？」とお声かけいただいたこともあって、通い続けることに決めた。

卒論は、クラスの中の一人の生徒さんと保護者の方にご協力いただき、「重度重複障害児への発達援助」というテーマで執筆した。毎回のフィールドワーク中に生じる私とその生徒さんの関わり場面に注目して、私が生徒さんにとどのように関わったか、それに対して生徒さんからどのような反応があったかを記録として残してフィールドノーツを作成し、発見したことをまとめた。発達援助というテーマであったが、手探りの関わりで、援助となるようなことはできなかったと思う。先生方は、私がクラスの児童生徒さんとスムーズ

に関われるように、さまざまに工夫をして教育活動に交えてくださった。例えば、「この音楽が〇〇ちゃんは好きなんだよ、流してみて。」という助言や、「〇〇君の今日の給食をこれからペーストにするけど、ミルサーって使ったことある？やってみる？」という提案に「今日のごはんは黒住さんがつくってくれたよ。」という声掛け等、挙げればもっとある。私がある場の一員となるように、本当に沢山の配慮をしてくださった。そのような温かいサポートのもとで現場に通い続けていると、あるときにふと「あ、(生徒さんが)私のことを認識してくれている。」と感じる出来事が起きた。瞬間的な出来事であったが、自分にとっては大きな一瞬だった。その瞬間が偶然ではないと確かめたい気持ちもあり、その後も通い続けた。その瞬間を回数や生起率、総時間数で表すと、大して意味のない数字になってしまうだろう。しかし、私の人生の進路選択に大きな影響を与えるほど意味のある瞬間として今も鮮明に記憶に残る体験となった。卒論は、この体験に関しても言及した。

このように、自分の人生に刻まれて忘れられない出来事となるような一度の経験、一度の出会いに遭遇し、その印象的な瞬間を捨象せずに描き出せることも、フィールドワークの醍醐味であろう。

## (2) 小学校通常学級でのフィールドワークの概要と振り返り

養護学校でのフィールドワークを卒論としてまとめたあと、私は「みんな同年齢の子と出会う機会は普段どのくらいあるのだろうか。もし一緒にいられたら、子どもたちはどんな風に関係を持つのだろうか。」という新たな疑問を持った。当時は将来心理士として働きたいのであれば大学院に進学するというルートがある程度確立されていたので、大学院の進学には迷いがなかったが、専門領域の選択はかなり悩んだ。やはり養護学校での体験が私に与えた影響はとても大きく、人が人との関わりの中で変化していくような人間発達についてもっと知りたいと思い、発達寄りの臨床をより専門的に学べるコースを選択することにした。

修士課程進学後、初めて修論構想を発表する場で、上述のような関心内容を発表したところ、1人の先生が「良かったら小学校に行ってみない？」と声をかけてくださった。その先生からのご紹介から始まったご縁が繋がり、自閉性障害のあるお子さんの介助員として小学校の通常学級に行くこととなった。のちに、別のご縁でつながった自治体が異なる他ケースからも研究協力が得られて、計2つの小学校でフィールドワークを行ない、そこでの発見を修論としてまとめた。

小学校に入って一番驚いたのは、場の情報量の多さである。浜田・小沢・佐々木(2005)が述べる教室の特徴と同じように、筆者の入った教室もまさに“混沌”であった。様々な出来事が同時多発的に至るところで起こっており、沢山の声と音が飛び交っていた。その場が人ごみの喧騒の中で、たまたま居合わせただけの状況ならば、混沌でもさほど問題はないのだが、筆者は見たいものがあるはずなのにどこに注目したらいいかわからない上に、聞きたい会話ははっきり聞き取れないため把握できず、当初はかなり困惑した。しかし、不思議なことに、クラスの子どもたちは友だちの声も聞き取れ、何をすればいいかも理解して、学習活動に取り組み、学校生活を送っていた。そして、私が困っていることを察すると、すぐに教えてくれた。そのようにして、混沌に巻き込まれつつも、混沌と感じていない彼らに教えてもらいながら過ごしているうちに、私もだんだんその場に慣れてきて、徐々にわかることが増えていったと思う。この経験から、混沌とした状況に飛び込み敢えて巻き込まれてみることで見えるようになることがあると知った。

修論でのフィールドワークは、卒論の時と比べると大きな違いがある。それは、ある程度のリサーチクエストン（ここでは、子ども同士の関係を見たい）を持ってフィールドに入ったことと、フィールドエントリー時から私には“介助員”という役割があったことである。初めのうちは、子どもたちに「先生？」と声をかけられることも多々あったが、私はその都度「まだ先

生じゃないんだ。」と説明し、「黒住さん」と呼ばれる人で居た。実際、私は学生で本当に先生ではなかったし、転校してきたばかりの子どもと同じようにわからないことばかりで右往左往していたので、子どもたちは、教室の場所や支援児への関わり方など、いろんなことを教えてくれ助けてくれた。私としても、先生でも保護者でもないお姉さんくらいの人である「黒住さん」としてフィールドに居られることが丁度よかった。その後、活動期間中に特殊教育から特別支援教育への転換もあり、私の肩書も介助員から学習指導員、特別支援教育支援員と変わったが、フィールドワークを継続している間は子どもたちから「黒住さん」と呼ばれる関係は変わらないままに過ごした。

この小学校でのフィールドワークは、6年目で一旦終止符を打つことになった。非常勤職の採用が決まったことに加えて、長く関わってきた学年の卒業も重なり、その小学校でのフィールドワークを終わりにする決断をした。

その後数年間はフィールドから離れた日々を送った。日々の行き先が絞られ、仕事に専念する時間は得られたものの、徐々にフィールド飢餓の状態に陥った。フィールドワーク中はポンポンと思いついた支援策のアイデアもなかなか出てこなくなり、困ったことになった。新たにフィールドを探し始めるのだが、一旦経験や職を持ってしまうと、学生のときのようなフットワークの軽さで現場に入ることは難しかった。このときは、細々とでも何かしらの形で続けておくべきだったと、フィールドを後にしたことを後悔したが、養護学校のボランティアでのご縁が思わぬところでつながり、5年ほど前から特別支援教育支援員としての実践を再開している。

久しぶりの支援活動では、学生の頃には感じなかった新たな悩みも出てきた。それは、小学校の教室の中では、もう「黒住さん」としては居られないということである。私は「特別支援教育支援員」として活動を再開したため、学校では他の特別支援教育支援員の方々と同様に「先生」という呼称で呼ばれており、観察よりも支援役割を優先すべき場面の方が多い。また、フィールドから離れている間に私自身も年と経験を重ねて変化したので、子どもの



立場に近いところに行こうと努力をしても、もう学生の時と同じ「黒住さん」で子どもに認識されることはないと感じた。学生の頃の私は、子どもに「黒住先生」と呼ばれると「実はまだ先生じゃなくてね・・・」と返していたのに、現在は先生と呼ばれることに違和感を持たなくなった。驚くことに、自分自身の一人称も「先生はね・・・」に変わっていることに気づいた。

フィールドワークでの研究者の参与の仕方には、観察者に徹するやり方から、研究者自身も通常の参加者と同じように現場と関わりと持つ度合いまで様々にある。フィールドワーカーの役割類型としては、Gold(1985)による分類が有名であろう。図1は、Gold(1995)の分類に、箕浦(1999)・佐藤(2007)・アングロシーノ(2016/2007)が挙げる例や説明も加えまとめたものである。

表1 フィールドワーカーの役割の類型

完全な観察者	研究対象とする場面と自分を切り離し、社会的接触を持たない。	(例) マジックミラーを通した園児の遊びの観察
参加者としての観察者	一度だけ現地を訪れてインタビュー等を実施するなど観察メインで参加はごく限られた目的でのみ実施する。もっぱら研究者として研究の「対象者」に関わる。	(例) PC教室での年配者とコンピューターの関わりの観察、刑務所内の支援グループでの認知的自己変容過程の観察
観察者としての参加者	メンバーと同じ立場で参加しながら、出来事が起こるその現場で観察する。必要に応じて聞き取りもする。調査目的でその場にいることが対象者に知られている。	(例) 心理学専攻の学生が児童放課後デイサービスでボランティアをしながら観察する
完全なる参加者	完全に溶け込む、ネイティブになる。調査をしているということは対象者には気づかれない。	(例) 教員が勤務先の学校を研究対象とした観察、潜入レポ

筆者の小学校フィールドワークを振り返ると、基本的には参加しながら観察をしており、完全な観察者となったことはない。それは、筆者が臨床発達心理士として療育現場や参与型の巡回相談に関わった経験があることも影響しているように思う。箕浦（1999）は、観察者と参与者の二重役割を往来し遂行する我々が社会生活の活動に参加する際に、おのおのの役割を持って活動に参加するのは通常の参加の仕方であるという。また、佐藤（2007）は、上記のようなフィールドワーカーのスタンスには変化とバリエーションがあり、「参与観察者」としての役割は固定して存在しているわけではなく、調査全体の各時期でダイナミックに変化するという。

これらの指摘を踏まえると、筆者自身のフィールドでの立場の変化は、悩むほどのことでもないのかもしれない。フィールドワークも支援実践と同じように、学生の時期だからこそ可能なフィールドワークがあるのかもしれないし、経験を積んだフィールドワーカーだからこそ可能になるフィールドワークもあるのかもしれない。佐藤のいうダイナミックな変化は、フィールドワーカーの成長過程として捉えることも可能かもしれない。今年度から研究活動としてのフィールドワークも再開したため、今後はフィールドワーカーとしての自分のふるまいの変化も捉えていけたらと思う。

### **(3) 交差点フィールドワークの体験と振り返り**

ここまで学校でのフィールドワークについて述べてきたが、在外研究先の東京大学教育学研究科ではまた一味違うフィールドワークの体験をした。前期に聴講させていただいた「質的心理学研究法」という授業では、自然場面のフィールドワークの体験として、交差点でのフィールドワーク実習を行なった。

交差点は日常場面だと言い切っても問題ないだろう。外出すれば至るところにあり、移動する際に当たり前のように私たちは交差点を渡る。この授業で学生に課された課題は、グループになって交差点を観察し、そこから意味

やルールを取り出していくということだった。事前に講義でフィールドワークに関する基礎的な知識を学び、観察エクセサイズも体験したうえで、実際に交差点に行くこととなった。

交差点でのグループ観察は、箕浦(1999)による①全体観察、②焦点観察、③選択的観察の過程にしたがって実施した。なるべく広く細かく交差点を見ること(①)から始め、各自見えたものを共有して観察対象を絞って集中的に観察(②)し、理論サンプリングと観察経過の確かめ(③)をするというプロセスを進めた。

筆者は6人グループで観察をすることになったのだが、最初の全体観察後の共有では多様な意見が出た。例えば、人(歩行者の属性、服装や持ち物、仕草、立ち位置等)、自転車(自転車タイプ、走路、進行方向等)、自動車(自家用車、タクシー、バス、緊急車両)に注目する人、交差点内に存在する物(交番、植物、石畳や落とし物等)など、幅広く言及され六人六様の結果となった。同じ時間に同じ場所に立って交差点を見たが、これほどまでに人によって見えているものが違うのかと、実に興味深かった。「三人寄れば文殊の知恵」と「船頭多くして船山に上る」の両方の言葉が頭に浮かび、観察実習を通してどのようなものが見いだせるかというワクワクする期待と同時に、観られるようになるためには心して臨まねばと身の引き締まる思いがした。

最初の焦点観察は、自転車に絞った観察を実施することにした。「自転車乗って横断歩道を渡る人は前方から来る歩行者を避けるだろう」と仮説を立てて、二手(3人+3人)に分かれて観察日も別日とし、共通のチェックリストを事前作成した。しかし、交差点で観察を始めるとその事前の努力虚しく、歩行者が横断歩道を渡る47秒間(信号が青の40秒間と点滅の7秒間)に行き交う人々の状況を記録するのは困難だった。そこでその場で記録方法を変更し、自転車の交差点内の走行パターン(渡り始めに居る場所が車道か歩道かと、渡り終わりに居る場所が車道か歩道かの2×2の組み合わせで計4パターン)を設定して、焦点観察を遂行した。

この試行錯誤の体験から気が付いたことは、効率的に結果を出さねばと力が入ると、無意識にすでに自分に身に付いているパターンの思考に当てはめて物を捉えようとする傾向が強くなるということである。何が見えるかわからない状況で漠然と見るのはものすごく不安になる。いつ見えるようになるかわからない見通しが無い状況での観察をするより、いかに効率的に観察するかという思考の方が合理的に思え、そう考えることで不安が軽くなる。しかし、一見合理的で効率的にみえるこの方法では、その見方の枠から外れた出来事は捨象されてしまう。でも一旦見えてしまうと、見方の枠を下ろすのはこれまたなかなか難しいのだ。

だが、授業内に設けられた中間報告会で、枠を下ろすためのヒントが得られた。他グループから、信号待ちの歩行者の立ち位置と日陰の相互関係や、信号を渡る群衆に見られる川字状の帯（↓↑↓）という発見が報告された。筆者の所属するグループの発表へのコメントでは「量的調査の側面が全面に出てしまっているのではないか」、「フィールドノーツによるデータが足りないのではないか」、「自転車車が車道走るか歩道走るかの選択はどのようになされているのか」という意見があった。この中間報告会を経て、一気に霧が晴れたように、次に何ができそうか見通しを持つことができた。それからグループのフィールドワークはとんとん拍子に進み、交差点を横断する自転車の進路選択は横断歩道と自転車レーンの間（レポートでは便宜的にグレーゾーンと名付けた）で起きていると見出すことができた。理論サンプリングする段階で、グループメンバーと交差点を観察しながら「あった!」、「今のそうだよ」と、自分たちでの観察で見出したルールを共有し、その存在を確認できた時間は、達成感でいっぱいだった。

この交差点フィールドワークで得た大きな学びは、行き詰まる前に悩まず他者に意見を求めるべきだということだ。質的研究では、主観解釈のバイアスを減らし、妥当性を担保するための工夫として、複数の観察者やチームで観察するという方法がとられる（柴山、2006）。つまり、妥当性の担保という

視点でも、分析結果が出る前段階で他者に意見を求めても良いということだ。一人でデータを抱えこまず、他の観察者や研究者に開いた状態にいる方が、ある意味で効率的であると解釈もできるだろう。

筆者は本稿のはじめにの部分では、筆者には研究が形にできていないという長年の課題があると述べた。データへの思い入れが強すぎて抱え込むことになった面もある。神崎（2023）は、フィールドワーク論文には、それがどのようなフィールドであっても焦点を絞っていくプロセスには紆余曲折の経験と視点の変化が含まれていることを指摘する。そしてギアーツ（1987/1973）の「人間は自分自身のはりめぐらした意味の網の中にかかっている動物であると私は考え、文化をこの網として捉える」という言葉を紹介しながら、フィールドワーカーには他者の意味の網だけではなく、自身がかかっている意味の網を同時に省察していく必要性を説いている。この神崎（2023）の指摘を読み、まさに私自身がこの状態であると思った。それと同時にやはりフィールドワークは面白いと思ひ不思議と笑いが起こった。

#### 4. 筆者にとってのフィールドワークの魅力

ここまで、筆者これまでのフィールドワークの概要を述べながら振り返ってきた。“静”になって道程を眺めると、フィールドワークを通して筆者が感じてきた喜怒哀楽がなんだかいとおしく思えてきた。これまで閉じていた気持ちで読んでいた文献では印象に残らなかった記述が、あらためて染み入るように響いてくることも増えた。不思議である。

伊藤（1997）は、「現場は、非日常であり、異文化である。身近なところにも、アタリマエなことを問ひ直す姿勢があれば、日常の中に非日常や異文化を見出すことができる。」という。たしかに、養護学校も小学校でのフィールドワークは、頻度的に見れば筆者の非日常である。また、交差点も日常の場であるように見えて、立ち止まって見てみるとそれまで見ようとしてこなかった交差点の様相に気が付く。フィールドワークは、一度や二度でそこで何

が起きているのかを把握することは難しい。でも諦めずに通い続けると、見えることが増えるにしたがって非日常の時間が日常のようになることもあるし、日常の中にそれまでに見えていなかった非日常を見つけることがある。なんだか、日常と非日常を行き来するかのようだ。「ハレとケ」のいう日本になじみのある概念とも通じるものがある。

フィールドワークでは感情が揺さぶられる出来事に遭遇する。初めてのフィールドワークの現場では、不安や緊張もある。フィールドに入れば偶然居合わせる様々な喜怒哀楽の場面に巻き込まれ、振り回されることもある。活動後は不全感に襲われ、無力感を引きずることも多々ある。この人間が生きる姿にある生々しさこそ、筆者が研究で描き出したいものである。

フィールドワークは、フィールドで生きる人々の生きる姿を知れると同時に、フィールドワーカー自身が自分の生きる姿も感じる研究方法なのではないだろうか。そこに私は魅力を感じているのだと思う。

## 5. おわりに

フィールドに向かう私は、いつも「今日はどんなことが起こるかな」と考えながら歩いている。もちろん、毎日特別なことが起こるわけではない。見つからないかもしれないけど見つかるかもしれない、宝探しをしにいくような気分で、特に代わり映えのない日も、それはそれで楽しいのである。

一昨年あたりから、甥（6歳）が恐竜にハマっている。私は恐竜に特別関心を持っていたわけではないが、恐竜関連のイベントや博物館などに同行する機会があった。今年は北海道の三笠市立博物館本物の化石でのクリーニング体験に参加もした。三笠市立博物館は、アンモナイトの展示で有名で、入り口入って1階にある展示室内には、北海道内で発見された爪ほどの大きさのアンモナイトもあれば、2.5mもある世界最大のアンモナイトのレプリカに至るまで、大小様々で種類も様々なアンモナイトが展示されている。展示ケースに並ぶ沢山の小さなアンモナイトには、発掘場所や発掘者の名前が書か

れていた。発掘者には一般人の方のお名前も多いようだった。それを見て思い出したのが、過去の恐竜関連めぐりで誰かに聞いた次の話である。

化石の発掘現場は研究者独占の場ではなく、一般の人にも開放することが多い。それはなぜかという、一般の人にも発掘に協力してもらった方が、より早く世紀の発見ができるからだ。そこでの研究者の役割は、化石が出る可能性がある範囲を特定することと、掘り出された化石が価値あるものかどうかを判断することだ、というような話だった。つまり、ここでの研究者はその価値ある化石を自分自身が一番に発見することは目指していないのだ。

古生物学や考古学といった発掘調査のフィールドワークの魅力は、太古の昔が現代に蘇るロマンにあると聞いた。発掘調査にある広い時間軸のロマンの話を、フィールドワークの日常と非日常の往来に感じる面白さに結び付けようとするのは、次元が違うと言われるかもしれないが、物語的で感情的な含みには強い親和性を感じた。筆者がなぜフィールドに行くかと言えば、そのフィールドにだけいる、言い換えればそこにしかない宝物を掘り出しに行くためと考えて発掘調査をイメージすると、これまでの足踏みと寄り道だらけの筆者の研究の軌跡に馴染む気がして、しっくりする。また、このロマンの話を通して、自分自身に足りないフィールドワークに向き合う姿勢も見えてきた。私がフィールドワークで発見して価値のあると思うことが、他の研究や研究全体にとって価値のあるものとなるかどうか（できるかどうか）には、やはりまだ自信が持てないが、自分の人生にとって価値のあるものであるとは自信を持って言えるし、研究を続ける動機として間違いではないかなと思えるようになった。

三笠市立博物館では、化石クリーニング体験にも参加した。ドリルの刃とハンマーを使い、刃を当てる角度とハンマーの力加減を調整しながら、化石についての余計な岩を落としていく。力を入れすぎると、破片が飛んだり指を打ち付けて痛い思いをしたり、大事な化石を傷つけてしまったりするが、ドリルの刃を当てる角度、ハンマーの面とドリルの上面の当たりと、ハンマー

を叩く力加減が良い感じで合うと、少ない力で化石に傷をつけずに、はりついた岩がぼろっと落ちるように剥がれる。左右の手で加減を試行錯誤しながら、コツコツと音がするこの地道な作業を継続していくからこそ、段々とコツがつかめてくる。はりついていた岩がきれいに剥がれて、化石の表面が顔を出すかようにお目見えする瞬間は、非常に達成感があった。この化石クリーニング体験のように、筆者もフィールドワークで地道な試行錯誤を重ねていけば、どこかで何かぼろっとはがれて、宝物が顔を見せてくれる日が来るかもしれない。意外な場所で意外なことに自分の研究を重ねて考えをめぐらす機会となったが、これもまた在外研究中の面白い体験であった。

## 引用文献

- アングロシーノ, M. (2007) 質的研究のためのエスノグラフィーと観察 (柴山真琴, 訳). 新曜社. (Angrosino, M. (2007) *Doing Ethnographic and Observational Research*. Sage. )
- Gold, R.L. (1958) Roles in Sociological field observations, *Social Forces*, 36, 217-223.
- 浜田寿美男・小沢牧子・佐々木賢(編) (2003) 学校という場で人はどのように生きているのか. 北大路書房.
- 伊藤哲司(1997) 現場(フィールド)への誘い. やまだようこ(編), 現場(フィールド) 心理学の発想(pp3-11). 新曜社.
- 伊藤哲司(2005) フィールドに関わる. 伊藤哲司・能智正博・田中共子(編)動きながら語る、関わりながら考える—心理学における質的研究の実践(pp49-62). ナカニシヤ出版.
- 神崎真実 (2023) フィールドワーカーの視点とともに現れる場——居場所プロジェクトの事例から. 質的心理学フォーラム, 15, 44-54.
- 箕浦康子(1999) フィールドワークの技法と実際——マイクロ・エスノグラフィー入門.



ミネルヴァ書房.

佐藤郁哉(2006)フィールドワーク増訂版——書を持って街へ出よう. 新曜社.

柴山真琴(2006)子どもエスノグラフィー入門. 新曜社.